

自由を得させるため

「ガラテヤ人への手紙」4章28節～5章1節までを朗読。

5章1節「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびきにつながれてはならない」。

パウロが地中海沿岸の各地に出かけて、イエス様の福音を語り伝えました。その中の一つがガラテヤという町でした。そこで多くの人々がイエス様を受け入れ、信じる者となって、教会ができ、集まりが持たれるようになりました。彼らは救いにあずかったことを大変喜びました。イエス様が自分たちの罪のために、十字架に死んで下さって、律法を完成して下さった。もはや、私たちは何も恐れることはいらぬ、罪を赦された者、義なる者とされたのだという大きな喜びがありました。特にこの当時は、ユダヤ教からの改宗者、本来ユダヤ教であった人達が、イエス様の福音に触れ、イエス・キリストを信じる者になっていく人が大部分でした。彼らの日常生活は、厳しいユダヤ教の戒律、しがらみに、がんじがらめになった生活でした。ところが、パウロから聞いて、「そうじゃないのだ、イエス様がすべてのものを解放して下さった」、言い換えますと、罪を取り除いて、様々な律法に縛られていた日々の生活を、根底から新しくして下さった。イエス・キリストを信じる者は、新しく生れたものであると、そういう事を聞いて、彼らは

大変喜びました。しかし、その生活ぶりが、だんだんと放縦になると言いますか、もう何も囚われることはない、自由奔放、何でもしていいのだという風な方向に走り始める。そればかりか、「何もしないというわけにはいきまい、神様を信じるなら、少なくともあれはすべき、これはすべきだ」と、本来、律法の世界から解放されながら、逆にそちらに戻ってしまう。これはよくある現象です。解放された喜び、イエス様の救いにあずかった喜び、それに慣れてしまう。そうすると、物足りない。何もしなくていいというが、どうしたらいいのかと、不安になる。

教会でもそういうことがあります。何もしないと、何か悪いような気がする。「何かした方がいいんじゃないですか。言ってください。言ってくればするのですが…」。そうなりますと、言われてする。言うならば、奴隷です。神様は私たちに「自由を得させるために」とあります。何か囚われた状態から、私たちが解放して下さる。確かにイエス様を信じることにより、私たちの生活が、人生が、根本から変わってしまう。「**だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である**」(コリント第二5:17)とあります。新しく、全く造り変えられた。それまでの古い生き方、古い生活から、新しいものへ変わることです。その一つの大きな特徴が、自由になることです。

自由と言うと、何でも好き放題出来る

と思ひやすい。「私のしたい事を何でも自由自在にするのだ」。それが妨げられることなく、はばまれることなく、すぐ出来る。出来る自由を考えますが、必ずしもそうではない。自由の中には、しない自由もある。「私はこれはしない」という選択をする自由があります。“する自由”と“しない自由”があります。神様が私たちに得させて下さったのは、その両方です。いろいろなことを許して下さい。ところが許された私たちは、「じゃあ、何でもしたらよいか」というと、そればかりではなく、自発の思いで、これはしないと決めることが出来る。そういう人が、本当の自由人です。その先を読みます。

「ガラテヤ人への手紙」5章13, 14節を朗読。

13節に、「その自由を、肉の働く機会としないで」とあります。イエス・キリストによって罪を赦された私たち、すべての罪が取り除かれ、神の子供とされた私たちが、自由だからと言って、自分の肉の働くところ、肉の思い、肉の感情、肉の力によって、何かしようとすることは、自由を捨ててしまうこと、自らを奴隷の地位に据えてしまうことです。その事は、すぐ前の、4章の28節以下に語られています。ここに「兄弟たちよ。あなたがたは、イサクのように、約束の子である」と言われています。その先のところに、「女奴隷の子」という言葉が出てきます。これはアブラハムのことです。アブラハムには子供がいませんでした。ところが神様は、彼を祝福して、多くの国民の父

とすると、約束して下さい。しかし、一向に結果が出てこない。アブラハムは焦り、考えた末、奥さんのサライが、「自分のつかえめ、女奴隷であるハガルによって子をもうけなさい」というのです。それで、一人の子が生まれました。イシマエルです。ところが、その後、神様は約束のごとく、百歳近くなったアブラハムとサライに、一人の子、イサクを与えられました。言うならば、イシマエルとイサクという、二人の子供がアブラハムの子供とされたのです。片や女奴隷の子、片や、サライという自由人の子とされています。自由の女、すなわち女主人であるサライの産んだ子のイサクがいます。

私たちはどちらであるのか。当時、イスラエルの人々は、自分たちは父祖アブラハムから受け継いだ神の祝福の民、選びの民、特別な民だと自負していました。その根拠は、神様が約束した約束を受け継ぐ民だからです。だからユダヤ人として生まれた者たちは、神様の祝福を受ける自由の女の子、言うならば神様の祝福にあずかる子供です。それに対して、ユダヤ人でない異邦人、その他の人達は神様から祝福を受けることのできない人間。言うならば、ハガルの子供達、罪の子供達、滅ぼされるべき子供達という世界観と言いますか、考え方がイスラエルの人々の中にありました。だから、ユダヤ教徒として生まれた者は無条件で、自由の女の子、イサクの子孫、末裔。それに対して、そうでない、神様の祝福にあずかることのできない他の民族は、すべて奴隷の女の子、ハガルの子、すなわちイ

シマエルの子孫である。これが当時の考えでした。

ところが、イエス様が衝撃的なことをなされた。それまでの、ユダヤ人は自由の女の子、ユダヤ人でない者は異邦人として、神様の呪いを受けるべく定められた人々であるという切り分けを、イエス様は完全に否定したのです。そして、救いとは何か。それは人種や宗教、そういうものに関わらない。それでいて、約束の子供、28 節に、「兄弟たちよ。あなたがたは、イサクのように、約束の子である」、神様の約束に基づいて、新しく造られた民、これが自由の女の子、イサクの末裔。アブラハムの子孫。肉にあって、いわゆる生物的な流れの中で、アブラハムの子孫だから、すべてが自由の女の子、イサクの末裔であることにはならない。そうではなく、イエス・キリストを救い主と信じる、言い換えますと、神様が終りの日にすべての者のために、救い主をこの世に遣わして下さる。そして信じる者は救われると約束して下さった。神様の約束を信じる者こそが、救いにあずかった、新しく造られた神の民である。ユダヤ人であろうがなかろうが、それに関わらない。イエス様はそれを成就して下さった。

5 章 1 節に「自由を得させるために」という一言でまとめられている。本来、私たちは、ユダヤ人でもなんでもないので。生物学的な流れから言うと、私たちははれっきとした日本人でしょう。しかし、日本人であろうと、何人であろうと、人種を超えて、約束の子供です。イエス・

キリストが、この世に降り、私の罪のあがないとなって、十字架にいのちを捨てて下さった。このキリストを信じて、新しいいのち、よみがえりのいのちに生かされる私たち。とって、何か具体的な姿、形も何もありません。あるのは、ただ聖書の約束の言葉です。

イエス様が私の罪のために死んで下さったと告白しますが、「そんなこと、どうして分かるの？イエス様に会ったことあるの？」と言われても、そんなことありません。「ゴルゴダの十字架に立ち会っていたの？」そうじゃありません。パウロ自身もそう言っています。「わたしはキリストと共に十字架につけられた」。パウロが、イエス様のあの十字架と一緒にいたのかというと、そうではありません。じゃあ、なぜそう言えるのか。それは聖書に約束されているからです。私たちは、今、約束の言葉を信じ、古い罪の生涯から切り離され、新しく生れた者とされたと確信を持つ。そのことを信じるだけです。その信仰を保証してくれるものはどこにもありません。あるのはただ、聖書の御言です。聖書に「私のためにイエス様が来て下さった」と言われるから、私は信じますと、その信仰の告白をもって、私たちは新しく造り変えられたのです。だから、日本人であろうと、何人であろうと、イエス・キリストを信じる時、罪と咎とに死んだ奴隷の子であった私たちは、新しいいのちに生きる者となった。ユダヤ人も同じことです。ユダヤ人は救いの民、神様の選びの民だから、イエス・キリストは必要ないというのではありま

せん。もはや旧約時代の切り分け、分類とは違って、イエス・キリストを信じなければ、たとえ、ユダヤ人であろうと、罪の奴隷の末裔です。ですから、「ヨハネによる福音書」を開きたいと思います。

「ヨハネによる福音書」8章31～36節を朗読。

これはイエス様の所に集まってきたユダヤ人たちに話されたことです。しかも31節、「**イエスは自分を信じたユダヤ人**」と言っています。イエス様に敵対した律法学者やパリサイ人ではなく、むしろイエス様を信じた人たちです。ですから、イエス様もおそらく集まったユダヤ人たちに、心をゆるしておられたかもしれません。「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子である」。イエス様の言葉を信じて、それにとどまっておく、それを守り行なうならば、わたしの弟子である。イエス様の弟子である。さらにその後、32節に「**真理を知るであろう**」。真理とは、イエス様ご自身です。そして「**真理は、あなたがたに自由を得させるであろう**」と。キリストを信じ、キリストと共にあるところに自由がある。イエス・キリストの約束の言葉を信じ、イエス様の言葉にとどまっているなら、すべて新しく造られた者、言うならば、アブラハムに与えられたイサクの末裔、子孫となることができる。約束の子であり、自由の女の子です。これが自由を得させるイエス様の救いです。だから、イエス様がそれまでのユダヤ教という世界、ユダヤ人達は

神の民、それ以外は滅びの民という切り分けから、その垣根を取っ払ってしまった。そして今度は新しい世界を造り出す。

それは、イエス・キリストを信じる者と、信じない者という二つの世界。そこには、人種も、性別も、年齢も、関係がない。イエス様を信じる者は、約束の子供であり、イサクの子孫。ところが、たとえユダヤ人であろうと、イエス様を信じようとしない、いつまでも罪の中にとどまろうとする人達は、これはハガルの子、奴隷の子であって、滅びの子であると、イエス様は新しい救いの道を開いて下さったのです。

ですから、32節に、「**また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう**」と。真理が自由、言い換えると、イエス様が私たちのうちに宿って下さる。イエス・キリストを信じる時、私たちは自由な者となることができる。イエス様はそうおっしゃる。それを聞いていたユダヤ人たちは何と言ったか。33節以下に、「**わたしたちはアブラハムの子孫であって、人の奴隷になったことなどは、一度もない**」と。その通りです。かつて奴隷になったことはありましたが、それから救い出された。自分たちは、そもそもアブラハムの子孫、言うならば、自由の女の子、イサクの子孫だと自負していた。「どうして私たちに自由を得させると、イエス様は言うのですか」と憤慨する。「そもそもユダヤ人である私たちは生まれた時から自由人であって、今更自由を得させるなんて、何と失礼な

ことではないか」と、ユダヤ人としての誇りに傷がついたのです。その時、イエス様の答えが、34節、「よくよくあなたがたに言うておく。すべて罪を犯す者は罪の奴隷である。そして奴隷はいつまでも家にいる者ではない」。すべて罪を犯す者は罪の奴隷、彼らは、「自分たちはアブラハムの子孫であって、一度も奴隷になったことがない」と言うけれども、しかし、「あなたがたは罪の奴隷ではないか」と言うのです。「あなたがたはその罪を、肉にある思い、この世の様々なしがらみに囚われて、それに引っ張り回されているではないか」、「ユダヤ教の厳しい戒律の中で、様々な戒め、律法の中にいるではないか」、そこには、神を畏れる恐れがない。救い主なるキリストを求める思いがない。己の力で、自分の肉にある力によって、義を得ようとしているだけではないか。それが罪であると、イエス様は指摘しているのです。「よくよくあなたがたに言うておく。すべて罪を犯す者は罪の奴隷である」。彼らは、自分達こそ立派なユダヤ人、神様の選びの民で、どこをとっても神様に咎められるところはないと。自分たちは、律法を守り、あれもしている、これもしているという誇りがあります。ところがイエス様は、「それは肉の力、神様の恵みによらない、罪の結果である」とはっきりと語っておられるのです。それを聞いて、彼らは理解できず、イエス様のもとを去って行くこととなります。

生れながらの人間が、そのままである限り、これは罪の奴隷です。私たちも、かつてはそうでした。私たちはユダヤ人

として生まれたわけではありません。そんな律法も何も知りません。しかし、私たちは神を畏れることを知らず、自分の思い、肉にある思い、自分の感情に支配されて生きてきた。そういう私たちを造り変えて、新しいユダヤ人、新しいイスラエルとして、私たちを立てて下さった。これが自由を得させることです。私たちもこのユダヤ人と同じ、奴隷になった事などないと思いますが、しかし、気がつかないうちに、私たちが育ってきた日本という社会の、有形無形、目に見える見えないに関わらず、常に「ああしなきゃならんのではないか」「こうしておくべきではなかったのか」など、社会習慣と言われるもの、世間と言われるものの目が、私たちの心を支配しています。「いや、私はそんなの気にしていません」と言いながら、何か一旦、事があると、「あれが悪かったのではないか」「もう少しこうしておくべきじゃないか」など、そういう事が気になって仕方がない。その感情の奥にあるのは、自我性です。肉の思いです。

子供の頃から、思わず知らず、気がつかないうちに、身についているものがあるのです。「この時期になったら、こうしないといけない。そうしないと、不幸になる。厄を払わないと」というふうに、気がつかないうちに、何かに縛られる。心が囚われていく。これが私たちの信仰の妨げになるものです。何か恐れているところがある。ご主人を恐れてみたり、奥さんを恐れてみたり、そういう事もあるでしょうが、世間の目を気にしたり、人を見たり、あれを見、これを見と、四

六時中、何かを絶えず警戒し、恐れながら、「これでよかっただろうか」、「あれをしておかなければいけなかったのではないか」、「言い過ぎたのではないか」と、そんな事ばかりがいつも心にある。だからこうしなければいかん、ああしなければいかんとなります。年を取ってきますと、だんだんと思いが固まって、「俺はこうしかできん」とか、「ああしかできんとか」、「こうでなきゃ、俺の人生はダメになる」とか、自分のこれまでの生き様を変えることができない。こうしなければいけないと、分かっているが、できない。

いろんな方々を見て、そう思います。もっと自由になったら、もっと「どんなことでもいいじゃない」と言えたら、どんなに楽ではないかと思えます。ところが、いや、やっぱりこうでなければダメとなる。家内の両親の老後の世話をしながら思ったことは、どうしても自分の生きてきた世界観、自分が育ってきた時代、そういうものが無意識のうちに、心にたがをはめる、何か縛り付けているものがある。「これはもったいない」「これは早くこうしなければ」、「これがあるのに、あれを使うわけにはいくまい」、そういう小さな事から、常に何かに追いかけていると言いますか、迫ってくる恐れのようなものが、不安がある。だから昨日の今日と、事無くやっておけばいい。年を取ると、若い人の言うことを聞けない。若い人が「お父さん、こうしたら」と言われても、受け入れない。年を取って、生活が不便になって、使い勝手が悪い。だから、台所をもう少し変えたら、と提

案しても、この何十年とやってきたのだから、このままでいいと言う。

ある時、冷蔵庫が悪くなって、「買い換えたら」「いや、これでいい。古びたんだから古びたものを使っておけばいい。あと1, 2年したら、自分もいなくなるのだから」。これでいいと言いながら、5年、10年と生きました。あの時、替えておけばよかったと。もっと自由に、思いをもっと広げていけばいいのにと思います。もっと神様の手に自分を徹底して明け渡して行く。「何があっても、OK。いいじゃない」「いや、それはいけない。ああしておかなければ、誰かが、何か言いやしないだろうか。言ったら言わしておけばいい。ところがそれが気になる。ガラテヤの人々と同じように、いくら自由といっても、「これはいけないだろう」「あれはいけないだろう」「クリスチャンらしくない」なんて言い出し、気がついてみたら、イエス様がいらっしやらない。これがまことに奴隷の生涯です。そこから私たちを解放して、自由を得させて下さる。

では、その自由はどこにあるのか。「コリント人への第二の手紙」を開きたいと思えます。

「コリント人への第二の手紙」3章17, 18節を朗読。

17節に「主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある」。ここです。主の霊のあるところこそが、自由なのです。すなわち、御霊の導きに従う

事、これが自由の完成です。イエス様が私たちを解放し、自由を得させて下さったのは、私たちのうちにキリストが宿って、御霊の導かれるところに従うことが、まさに私たちの自由です。そうでないと、私たちは肉の力にすぐに支配されます。「主がなんとおっしゃるか」、「イエス様がよしとおっしゃるならば」と、そこにいつも心を向けていく。どんなことでも、イエス様がよしとおっしゃるのであれば、喜んでそこに従っていく。ところが、その主の霊が消えて、自分の思いだけが、感情だけが、先立っていきますと、不自由になります。いろいろな意味で、私たちはしがらみに、また立ち戻って行ってしまう。だから「もう古くなったから、これは替えたら」と子供たちから言われる。「いや、大丈夫。まだ、使えるからいい」と、そうやって、我を張る。子供がちよっと一言、「でも新しい方が電気代も安くなるよ」「そう。じゃあ替えよう」。電気代が神様になってしまう。そこに囚われるのです。たとえまだ見えそうであっても、「主が許して下さるのなら、新しくやり替えようじゃないか」「主が何とおっしゃるか」「イエス様が導いて下さるならば、どんな事でもしようじゃないか」と、主に従うこと、御霊の導かれるところに従うこと、ここにこそ自由がある。そうでないと、つい自分の感情や損得利害、そういうものが、私たちの足を引きずります。歩めなくなる。自由に動くことができない。しょぼくれて、神の栄光を失ってしまう。救いにあずかった自分がどういう者であるのか。神の霊、キリストがいらっしゃるところ、そこに主と

共にある。それが自由です。そこから離れて、人は自由になることはできません。

「ガラテヤ人への手紙」5章1節に、「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびきにつながれてはならない」。奴隷のくびきにつながれる。自分は奴隷なんかになったことはない。でも気がつかないうちに、いろいろな支配するものが心を縛り、楽しく、喜び輝いて生きるべき日々を、暗く沈んだものに変えてしまっています。だから堅く信仰に立つことです。今、私を導いて下さることがある。神様が、私に許して下さっていることがある。人の事を思い、人の顔を見て、人の言葉によらないで、「主がなんとおっしゃるだろうか。神様の求めたもう、神様が願っていらっしゃるのなら喜んで」と、そこに、心定めて従う時、自由があるのです。

先日、曾野綾子さんの本を読みました。彼女が、ご主人の老後を看取った記事です。91歳で亡くなったそうですが、ご自分はその時85歳でした。最初は施設にお願いしたのですが、様子を見てみると、あまりにもかわいそうに思う。自分が看るのも大変だと思ったのですが、ある時、「これは私がしなきゃいけない」と思った。何がそう思わせたのかと言うと、運命だと思ったというのです。一般の人向けの文章ですから、運命という言葉を使ったのですが、彼女は、更に説明して、自分はカトリックの信者ですから、運命というより、神が私に求めて下さったこ

と、「この主人を最後までお前が看取れ」と、この使命を与えられたと思った瞬間、喜んで、この主人のために、主人というより、神様がそれを喜んで下さると、心から信じた瞬間に、様々な思いが一切消えたと語っています。どんなことでもそうでなければ、上手く行ったら自分が得意になるだろうし、上手く行かなかつたら、人のせいにしたたり、自分を責めたりして、それでおしまい。しかし、彼女は、神様から託された尊い使命だと受けた時に、心が変わった。そして、喜んで、それを全うすることができたと告白しています。私はそれを読みながら、神の霊、キリストの霊に従う、これは主が求めておられること。このことは神様が許しておられる。これは神様がよしとして下さっておられるのだと、そう信じるならば、何をしてもいいのです。「コリント人への第一の手紙」には、「すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない」と言われています。だから徳を立てるために、どんなことでもすることができると、パウロはそういう言い方をしていますが、それは神の御霊に導かれているところにこそ、自由があり、私たちの喜びがある。望みと力とが沸いてくるのです。その自由を得させるために、キリストは、私たちをこの罪の生活から救い出して、新しく創造して下さったのです。新しくされた私たちは、徹底して、主のみこころに、「イエス様がよしとおっしゃるならば、このことをしましょう、あのことをしましょう」。だからこうだからダメ、ああだからダメと決めるのではなく、主が

何とおっしゃるかです。

「ローマ人への手紙」の14章にもあります。食べる者は感謝して食べるし、食べない者も感謝して食べない。食べるにしても、食べないにしても、私たちは主のものなのです。一人一人が、「あの人があんなにしている、おかしい」、「あの人、クリスチャンと言いながら、なんであんなことしているの」、そういう定規で、尺度で、計ろうとした途端、私たちは奴隷になります。罪の奴隷となります。一人一人が主の霊に導かれているのですから、自分も導かれるところに従えばよい。人のしているところを見て、まねをするのではなく、私はどうするのか、私はキリストに対してどう答えるのか、イエス様の御心に、私はどのように仕えるべきであろうか。そこで自分が神様の前に決断していくところに、本当に自由があります。その時、私たちは何をしてもよい。しかし何をしなくてもよい。してもよし、しなくてもよし。ただ言えるのは、あなたは今、御霊の、自由の霊に従って歩んでいるのか、この一点に、徹底して自分の思いを向けておきたい。「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである」。今、私たちは、このキリストの自由の霊に導かれ、生かされている者であることを絶えず覚えておきたいと思います。

ご一緒にお祈りいたしましょう。